



藤木光明（ふじき・みつあき）は1975年長崎県生まれ、名古屋芸術大学大学院美術研究科造形専攻修了、96年からの活動歴のグループ展を見ると、名古屋から茨城に活動の拠点を移したように見える。初個展は2012年の茨城であり、今回、ステップスでは初、個人としては二度目の個展の様子である。

藤木は今回、『water surface』シリーズを七点、展示した。いずれも波の写真をトレースし、画面に埋め込んでいく。背景には植物の拡大図を配置する。それにより二つの図が互いに振幅し、画面に深みを与えていくという役割を果たす。この効果を最大限に利用するために、作品のサイズにより波の文様、植物のサイズを配慮しているように感じる。

藤木の作品の面白さは、波と言う不定形を絵画として留めようとする点にある。波に理想的な形など存在しない。しかし実は我々は、波のように流動的な存在に対しても、瞬時の形を読み取る能力を持っている。そしてそれを、美しいと感じる感性を携えている。それでも波を描き切ることは不可能である。そこに挑戦する意義が生まれる。そのように考察すると、藤木が波に魅せられる気持ちに近づいていく。存在しない「絶対」を描く心持が重要なのだ。



藤木はそのような波を描きたいために、写真を使用する。19世紀末から20世紀、それどころか今日に至るまで、現代美術は写真と対立しながらもその特性を引き出し、利用し、混合してきた。F・バーコンは西洋絵画そのものを終焉させようとしたが、最も不可欠な要素が写真であったのだ。そして写真を利用した。

藤木は写真を利用しない。写真でなければならないのではなく、他の媒体があればどれだけ利用するか。それどころが、自分が写真になりたい、そして自己の絵画を深めたいと感じているのではないだろうか。このような純粋な思いとは、写真を利用し続ける美術の領域では珍しく、そして、不可欠な発想になる筈だ。

このような深い洞察が読み取れる波に対して、確かに植物とその色彩にはより深い追求が必要となるのであろう。ところで藤木は何処の波を描いているのだろうか。憶測になるが、それは菱田春草が見た五浦でなくとも、少なくとも茨城の海なのではないだろうか。すると、藤木は図らずとも春草の想いを引き継ぐことになってしまう。理想を追うことよりも、卑近な存在の声に耳を傾け、一体化すること。すれば植物も色も、全く異なった意味で光り輝いてくる。

